

「電子処方せん」実験

香川大と徳島文理大、県立保健医療大は29日、病院と県内の調剤薬局をネットワークで結び、処方せんをやり取りする「電子処方せんシステム」の実証実験を始めた。システムが普及すれば、医師と薬剤師の情報共有や、副作用情報の集積などが期待できるという。

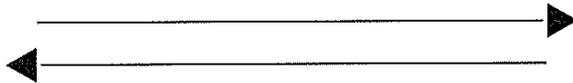
【吉田卓矢】

実験は、文部科学省の「戦略的大学連携支援事業」で来年3月末まで。香川大医学部付属病院と県内30カ所の調剤薬局をネットワークで結び、電子カルテをやり取りし、データ送信状況の確認や利用した患者、医師、薬剤師への意識調査をする。初日は、同病院の石田俊彦院長が診察した患者5人に実験内容を説明。うち参加薬局を利用する患者1人がシステムを使い

ました。患者は説明を受け、同意書に署名後、専用端末で希望の薬局を選択。処方せんを送信した。同システムは、徳島文理大香川薬学部の飯原なおみ准教授らのグループが、両大学と連携し「かがわ遠隔医療ネットワーク」(K-MIX)を利用し、K-MIXを開発。K-MIXが病院同士を結ぶのに対し、同システムは、病院と調剤薬局を結び、処方せん情報を電子的に相互にやりとりする。

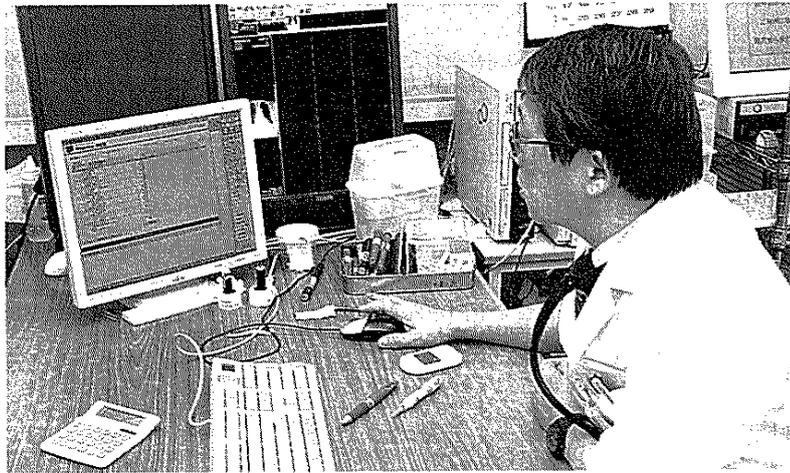
病院

病名や検査データなど



薬局

副作用や患者の話など



薬剤師からのコメント欄を確認する石田俊彦院長
—三木町池戸の香川大医学部付属病院で

現在、薬剤師は医師が患者に処方した紙の処方せんをもとに調剤。病名さえ知らされなかった。

同システムの導入で薬剤師は病名や検査データなどの情報が分かり、より

きめ細かい服薬指導ができる。更に、薬剤師が把握した患者の副作用や調剤薬局で切り替わったジエネリック医薬品などの情報を記入し、医師に確実にフィードバックできる。

石田院長は「患者の情報と共有するコミュニケーションツールとして有効」としつつも「医師と薬剤師が別々のコメントをして患者が混乱しないよう、薬剤師がまず医師に情報をフィードバックして確認するなど、患者への情報の出口の一元化が大前提」と話していた。



ネット化で情報共有

3月末まで

一方、参加する三木町池戸、アイ調剤薬局の原文晴・管理薬剤師は「患者に医師の指示などを確認しても『わからない』という人もいた。そんな時『患者の理解が十分でない』などの情報を医師に伝えられる」。また、高松市前田東町、ツヤマ薬局医大前店の西峯章代・管理薬剤師は「医師に言えずに話し込む患者もいる。そこでの話なども医師にフィードバックしたい」と話していた。